

俱舍論破我品の別撰論問題について

三 友 健 容

従来、俱舍論の破執我品に関して、世親の本領がないということより、破我品のみは前八章とは別に造られたのであろうという考え方が、既に江戸時代の豊山派の僧、快道によつてなされたのである。また近年、山口益・桜部建博士らによつてこの問題が研究されたのであるが、梵本が発見された今日、あらためて検討したいと思う。

この問題を整理してみると、

① 俱舍論の前八章と破我品とが同時の作であるとした場合、本来ならば最後の章である破我品が終つてのちに造論の主旨が述べらるべきであるのに、何故に定品の終りに造論の主旨を述べ、破我品を全体の附論としたのか。

② 前八章が全て、定品というように「品」が使われているのに、破我品のみなぜ「論」と使われ、呼び名も一定していないのか。

③ この破我品のみ、なぜ前八章の文章構成法(即ち頌の後にその説明をする)のと違つているのか。

④ なぜ七言三頌と破我品の反駁が順正理論にないのか。

⑤ *Abhidharma-kośa* は本来諸法の分類とその解釈であり、*Puṅgalakośa* は異質のものであるのに、なぜ一緒にされて *Abhidharma-kośa* と総称されるのか。

dharma-kośa と総称されるのか。
と云ふことに要約される。

この中、②については、快道も指摘するように、定品を指すのに *Samapatti-nirdeśo kośa-sthāna etad akhyāyisyate* と云う *kośa-sthāna* を使ふ、世品を指す場合 *Loca-nirdeśa-kośa-sthāne hi……* と云う *kośa-sthāna* を使ふ、前八章を指す場合には共通して、この *kośa-sthāna* を使ふのであるが、破我品に関しては *Pudgalavade vicārayisyāmaḥ* と云う *Pudgala-vāda* を使ふ、漢訳では、「破我品中当広顯示」と云う「品」が使われている所も、*ātmavāda-pratīśedhe sampravēdayisyāmaḥ* である。ただ、ここへ気になるのは、破我品を指すのに *Pudgala-vāda-ātmavāda-pratīśedha* と云う用語が一定して用いられるのであるが、このことは、*Pudgala-vāda* を使つて破我品を指すときには、その内容が *Kasyēti saśhim pudgala-vāde vicārayisyāmaḥ* と云う、属格に関する問題提起は、犢子部の「トカラ説の中で答へようのであるから、業品では説く必要がなく」と *Āma-vāda-pratīśedha* を使うときは、*Tat pūrvakat samtāna-vīśeṣād ity Āma-vāda-pratīśedhe sampravēdayisyāmaḥ* とあり、業の相續・転変に関することは、破我品中に、勝論学派の *Ātman* 説を破するとき説明しているのであるから、随眠品の中では説く必要がないことになっている。ここをもつて、単に破我品は *kośa-sthāna* ではなく *vāda* を使つているから別論であるとするべきではなざと思われる。

また、快道は破我品が別なる理由として、正理にこの論の反駁のみが欠けているではないかとするのだが、正理を丹念に読んでいくと業を論ずる中に、「応問此中何名相續、何名転変、何名差別。……

不染汚者随心相統至無余依般涅槃位与等流果所有功能方畢竟息。」(大正二八、五四一、下)という文があるが、これは破我品のみに出てくる業の考え方で、しかもこの正理の文は一偈を除いて全く梵本の破我品の文 (Abhidharmakośa-bhāṣya. p. 477) に一致するのであり、明らかに衆賢は破我品を知つていたことになる。

また、その他の問題について見るに、玄奘訳俱舍論の本頌及び西藏訳本頌には、ゴーカーレー本のように破我品の偈頌を入れることなく、造論の主旨をのこ、いわゆる流通分といわれる七言三頌で終つてゐることから、伝説の通り初めに *Kārika* を作り、その後はその解釈をなしたとするならば、世親は *Kārika* を造つたときには、造論の主旨を述べて終る予定であつたのが、その後、長行を作るに及んで「無我説」を述べる必要性にせめられたために、*Kāṣyēti saṣṭhiṃ pudgala-vāde vicaravīśyamah.* 或は、*Tat pūrvakat samtāna-vīśeṣād ity ātma-vāda-pratīśedh e sampravavedayīśyamah* としう未来形を用いて、後に述べるであろうことを明し、この *Abhidharma-kośa* 即ち法に対する解釈とは別に人無我を解釈する *Pudgala-kośa* をつけたして、この破我品の終りに、*Pudgala-kośam Abhidharma-kośa-bhāṣyaṃ samāpam.* (以下カラ俱舍を含む阿毘達磨俱舍論が終じた。) と書いたと思われる。このために、破我品を必ず *Abhidharma-kośa* の中の Chapter を表わす *Kośa-sthāna* とはなへ、*Vāda* としう言葉を使ったのであり、また、前八章までは先の *Kārika* に対して註釈するとしう文章構成法であつたのが、*Kārika* がなごためた *Abhidharma-kośa* とは違つた *Style* になつたと思われる。また、七言三頌については、快道はこの偈頌が破我品の発起の序であつて、衆賢がこの破我品を見なかつたがた

俱舍論破我品の別撰論問題について (三友)

めに、七言三頌を正理に書かなかつたとしてゐるのであるが、先に述べたように正理の中には破我品に出てくる業の説明文がそのまま出てくることより、明らかに衆賢は破我品を知つていたのであり、*Yasomitra* 等の諸賢が破我品を第八章に入れたり、あるいは本品とは別に第九章としてたりして名称に關しても一定しておらず、しかも梵本の *Yasomitra* 訳では、本品の説明のあとに、以上本品が終つたという意味の言葉がなく、すぐに破我品の文に続いていることから、世親は本品の後に、*Abhidharma-kośa* 全体の總結ともいへべき七言三頌を書き、それによつてすぐに破我品の文章を書いたがために、後の時代になつて本品と破我品を区別するときに、この七言三頌を本品に入れて *Pudgala-kośa* を第九章とする見方や、或いは破我品の発起の序とする見方等があらわれたのであつて、単に真諦訳を誤まれる梵本による翻訳とすべきではないと思われる。

また、順正理論が反駁しなかつたのは、人無我に關しては、有部も世親も一致する所であり、*Pudgala-kośa* に出づる憶念 (*smṛti*) 等の問題は別に新しい問題ではなく、すでに婆沙論で論ぜられてゐることであるから、衆賢はあえて論駁することを避け、ただし、*Pudgala-kośa* の中に出てくる業の問題に關しては、明らかに立場を異にするから、そのことについては、業を論ずる中で反駁したと思われる。

かくして、破我品は全くの別論ではなく、世親が *Abhidharma-kośa* に附随して書いたと思われるのであるが、快道の指摘するようにな、内典録に真諦訳破我論疏一巻とあることより、或いは後世この破我品が一つの論としての形式をもつことから *Abhidharma-kośa* と切り離して流布していたことも充分考えられうることであらう。